

革を用いた刀剣の拵について

又木 彩花

一、初めに

日本において刀剣がいわゆる「日本刀」と呼ばれる、緩やかな反りがある形になったのは、平安時代中期以降とされているが、それ以前の反りのない上古刀の時代から刀剣の拵には螺鈿や蒔絵をはじめとする、漆での加工や金属加工など、他の工芸品と共通する素材や技法が使用され、時代ごとの技術の発達や流行が反映されている。

しかし、刀剣の拵に当時の芸術的な流行が反映されてきた一方で、武器である刀剣ならではの素材で、他の調度品ではほとんど見られない素材として、革が挙げられる。

戦闘用としても、参内の際に佩用する儀仗用や寺社仏閣への奉納用としても、現存する刀剣の鞘は蒔絵や螺鈿で装飾されているものが圧倒的多数であるが、武具や馬具と同じく、革が主となる素材として用いられているものも多く見られる。

革には、そのままでは水に弱い一方で、濡らして加工すれば変形も容易で、乾いたときには固まるという特徴が見られる。さらに、上から漆を塗れば防水ができてさらに強度が上がる。

革を用いた刀剣の拵について

このような性質を持つ革を用いた拵は多数現存するが、漆で仕上げた拵と同じく、その装飾性から分類できるように思える。そこで、革を用いて制作された鞘を分類し、それぞれの作品がどのような意図をもって革を用いて制作されたのかを検討し、革を使った拵にも技法の発展や当時の流行の反映が見出せるのか検討したい。

二、刀剣の保護を目的とした拵

まず、実戦を想定した戦闘用として制作されたと考えられる刀剣について考えたい。

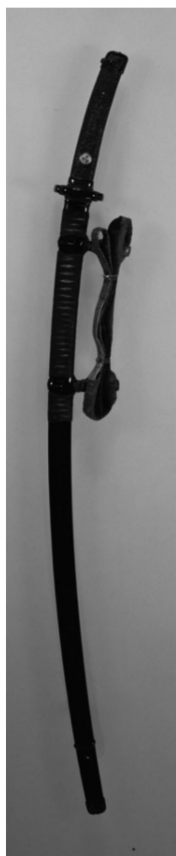
最もポピュラーなものとして挙げられるのは、十三〜十四世紀の作で、武家の常用の太刀として絵巻などにも描かれる形式の『黒漆太刀拵』（挿図1）である。特定のモチーフや柄などが見られない武骨な外見で、鞘だけでなく柄や金具に至るまで、拵全体が黒漆で塗られ、鞘に張られた革を保護する目的だけでなく、金具のサビ止めとしても漆を使用して、武器としていかに長く使えるかという点が追究された形式が見られる。金属の錆止めに關しては、刀身を保護するために塗られた例もあることから、現存するこの拵だけでな

く、金属に一般的に用いられてきた手法が応用されているのではないだろうか。

同じく、刀身の保護に重きを置いた作例として十四世紀の作、『革包太刀拵（号笹丸）』（挿図2）と呼ばれる拵が挙げられる、鞘の全体を皮で包んで黒漆を塗った上に、鐔にも革をかぶせ、刀剣や刀装具の破損を徹底的に防ごうとする特徴が見られる。

これらの拵には、鐔をはじめとする金属でできた刀装具の形や、笹を模した節といった意匠は見られるものの、飾太刀に見られるような華やかな装飾が見られないことや、刀剣が主な武器として使用されたであろう制作当時の時代性から考えても、装飾性よりも実用性を重視して制作されたものであると言えるだろう。

挿図1 『黒漆太刀拵』 東京国立博物館



挿図2 『革包太刀拵（号笹丸）』 愛宕神社（京都）



三、装飾性を重視した拵

次に、革を用いていて、かつ装飾性が重視されたと考えられる作品について考えたい。

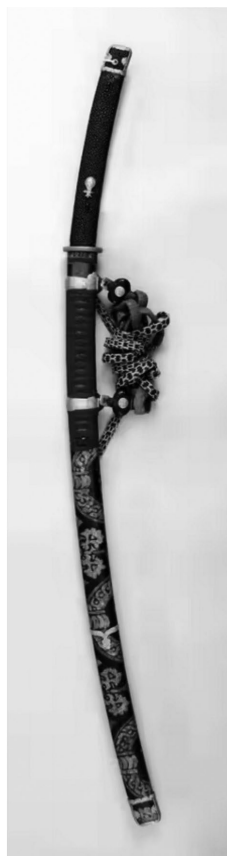
特に特徴的なもので、かつ数点類似した作例が現存するものに、鞘に鶴の足の革を張って研ぎだしたものが存在する。（挿図3）製作者などの詳細が不明であることから、使用された革が本当に鶴の革であるのか、また、鳥の革というほかの工芸品では見られない素材を、どのような経緯で拵に使用することになったのか、検討すべき点は尽きない。しかし、鳥の足の鱗のような模様が見えるように研ぎ出されている点を考えると、前述した『黒漆太刀拵』などとは異なり、鱗のような模様に装飾性を見出して、ただ上から漆塗りをするだけでなく、模様を生かせる技法で使用されたのではないだろうか。漆を用いた研ぎ出しという技法は、硯箱や家具に至るまで、様々な工芸品に使用されている技法ではあるが、研ぎ出される素材は貝や金属粉が主で、革の模様を生かして研ぎだす装飾は拵や印籠でしか見られないという点が、武器である拵の装飾が他の調度品とは異なる点である。

また、こちらもかなり限られた作例ではあるが、日光東照宮の『金唐革包太刀』（挿図4）の拵にも革を用いた装飾が見られる。金唐革というのは、なめした皮に銀箔などを貼って文様を施したもので、日本には十七世紀以降に主にオランダ製のものが輸入され、日用品に加工したものが町人などの間でも流行した素材である。しかし、東京国立博物館の酒井元樹氏は、「日光東照宮所蔵「金唐革包太刀」について」において、この金唐革包太刀の拵に用いられる金唐革はオランダ製の動植物を表すものとは少し異なり、抽象的な文

挿図3 『鶴足革包研出葵紋散御召鎧鞘打刀拵』 刀剣博物館



挿図4 『金唐革包太刀』 日光東照宮



様で色数が少ないことや、この革が制作されたとされる十六世紀は家康がスペインとの交渉を行った期間とも重なっていることから、『金唐革包太刀』の拵に用いられた革がスペイン製と考えられる点を指摘している。

金唐革という高価な輸入の素材が用いられていることや、装飾性が高く、『黒漆太刀拵』などと異なり、革を保護するための漆が塗られた様子の無い革張りであることから、一見、贈答用などの実用性の重視されていない拵にも見える。しかし、酒井氏は同著において、拵に貼られた金唐革には厚みがあり、鞘棟方の隙間には鞘の補強や防水目的と思われる漆が充填されており、装飾品としてだけでなく、実用品としての堅牢さも持ち合わせている点を指摘している。

一方で、用いられた金唐革には、日本ではあまり見られない、異

革を用いた刀剣の拵について

国情緒漂う模様が見られ、拵に用いられる作例も日光東照宮の一作以外には見られないことから、ただ革の堅牢さを求めて金唐革を使用しただけでなく、その装飾性や希少性から刀剣の拵として加工されたことも明らかである。元来、輸入された金唐革は当時、主に煙草入などに加工されることが多かったようだが、鞍などの武器にも使用されていることから、やはり『金唐革包太刀』も実用性と装飾性を兼ね備えていて、自身の武力だけでなく、希少な素材で自身の武器や武具を装飾することができるほどの権力を誇示するために理想的な素材であったのではないだろうか。

本来納まっているはずの刀身が現存せず、また、どのような刀剣が収まっていたかも伝わっていないにも関わらず、拵だけが伝世してきたという点からも、この特殊な素材を用いて制作された拵が、ただの実用品としてだけでなく、刀剣の持ち主の身分や為人を反映するものとして重視されていたことが伺えるのではないだろうか。

このように、一口に革を用いた拵と言っても、刀身の保護を第一とした革着せの鞘から、革の模様を生かした特殊なものまで、時代や様々であるが、その中でも特に古くから拵に用いられてきた素材として鯨皮が挙げられる。

四、鯨皮と拵

江戸時代の刀剣研究科・稲葉通龍が鯨皮について記した『鯨皮精義』では、鯨の産地などでその質に評価がつけられていることから、当時東南アジアをはじめとする様々な国から鯨革が輸入され、加工されていたことが伺える。また、鯨の種類によっても模様が異なるようで、水玉模様に見えるものや梅の花のように見えるものなど、

様々な種類の革が輸入されている。同書の鮫皮も他の革と同じく、そのままでは湿気や汚れに弱いという記述からは、高価な反面、性能は他の革と大差ないように見えるが、作例の多さからは鮫皮が刀剣の拵においては好んで使用されてきたことが伺える。

刀剣の拵においては、八世紀の『金銀鈿莊唐大刀』（挿図5）など、日本刀の初期の作例にも鮫皮の使用が見られる。しかしこの頃は、鞘の素材として皮を用いたのではなく、柄にそのまま貼ったような形で用いられているものがほとんどであり、鞘の表面に鮫皮を用いて磨き出したような作例は見られない。

その後、刀剣が戦闘の主な武器として使われる様になるにつれて、柄に貼った鮫皮の上から漆を塗って湿気や汚れを防止したり、より握り易いように上から組紐を巻きつける柄巻がされるようになったりと、柄に用いられる鮫皮は実用性が向上していく。

その後、刀剣が武器というよりも献上や下賜の対象になり、装飾性がより求められるようになるにつれ、鞘に鮫皮を貼って研ぎ出したものが流行し始める、この頃にはすでに刀剣が主な武器として使用されるようになった後であり、ほとんどの刀剣に柄巻きがされていて、柄に用いた鮫皮の美しさを見せることができなくなったことから、鞘に鮫皮を貼って研ぎ出すという装飾が現れた可能性も考え

挿図5 『金銀鈿莊唐大刀』 正倉院



られるのでは無いだろうか。

また、同時代のものに『菊造腰刀』（挿図6）という腰刀が現存するが、この作品の鞘には、『牡丹造梅花皮鮫鞘腰刀拵』（挿図7）に見られる、梅花皮（かいらぎ）と呼ばれる鮫皮を研ぎ出した際の梅の花のような模様の模倣が見られる。このような鮫皮を模した金属の装飾は打ち鮫とよばれ、金属の板の表面に鮫の皮の模様を打ち出すもので、その素材に応じて金鮫や銀鮫と呼ばれる。初めは柄に用いられていた鮫皮が、刀剣の装飾性が広がって行くとともに、その美しさが受容され、別の素材で模倣して製作されるに至ったことは、鮫皮の実用性だけでなく、その模様の美しさが評価されていたことの裏付けとなるのでは何だろうか。

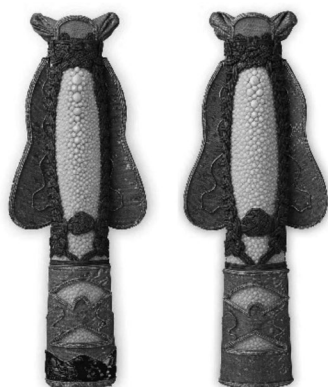
やはり、鮫皮の用いられ方という点からみても、刀剣の拵は実用性はもちろんのこと、その装飾においても、当時の戦闘方法や漆工

挿図6 『菊造腰刀』 東京国立博物館



挿図7 『牡丹造梅花皮鮫鞘腰刀拵』 京都国立博物館





挿図8
献上鯨 / 刀剣ワールド

関しても、柄に巻いた組紐の間から鯨皮の大きな粒が見える様になっているものがほとんどであることから、やはり、柄に用いられた鯨皮は見せるためのものでもあり、実用性と装飾性を兼ね備えたものであったと考えられる。

技法の反映が見られるのは明らかであるように思える。そのような、時代や場面によって求められる性質が変化する刀剣を装飾するにあたって、革としての堅牢さだけでなく、様々な独特な模様を有する鯨皮は実用性と装飾性を兼ね備えた好都合な素材として、長年に渡って使用されてきたのではないだろうか。

鯨皮を用いた作例を見ると、鯨皮の凹凸を生かして握りやすさを求めたものから、時代を経るごとに鯨皮の装飾性が生かされ、鞘にも使用されるようになったようにも思える。しかし、凹凸があり握りやすいという、実用性だけが評価されていたわけではなく、柄だけに鯨皮が用いられていた『金銀細工唐大刀』の時代にもその装飾性が評価されていたのではないだろうか。

というのも、柄に鯨皮が用いられていて、さらに漆塗りや柄巻きがされずに剥き出しになっているものは、主に儀仗用や奉納用として使用されたものであり、実戦を想定して製作された刀剣に比べ、形式や見た目の豪華さが重視される刀剣であった点を考慮すると柄に見える状態で用いられた鯨皮も、その並んだ白い粒の美しさが重視されていたのではないだろうか。上から柄巻きをしているものに

また、江戸時代には献上鯨（挿図8）という献上品が存在しており、質の良い鯨皮はすぐに工芸品へ加工するのではなく、献上鯨に加工されて將軍へ献上されていたことから、鯨皮は実用品として何かに加工できることだけでなく、その美しさや品質の高さが重視されていた当時の状況が伺える。

つまり、はじめから実用性と装飾性を兼ね備えた素材であった鯨皮は、漆工技術の発展により刀剣の鞘にまで用いられるようになり、より装飾性の幅が広がっていったと考えられるのではないだろうか。

五、最後に

拵に関しては作品ごとの詳細な情報が少なく、現状では古代から近世に至るまで、拵が制作されてきた中で、革という素材がどの様に受容されていたのか、あくまで作例研究に留まる形になった。現時点では漠然とした傾向にはなるが、やはり刀剣そのものや漆塗りの拵のあり方と同じく、革を用いた拵に関しても、時代が下り、刀剣の実用性が薄れていくごとに実用性よりも装飾性や素材の目新しさが求められるようになる傾向が見られる。

今後の課題としては、本稿では触れることのできなかった、作者や工房についての検討を挙げたい。

現時点では、技法や素材が多岐にわたる拵の制作は、すべて鞘塗師が対応していたわけではなく、依頼者の希望に対応できる職人が都度対応していた可能性が高いと考える。今回取り上げた作品に関して言えば、漆工技術だけでなく、革の加工が必要であることから、武具や馬具の職人が革の加工を請け負っていた可能性なども視野に入れて引き続き調査を進めたい。